

甲斐駒ヶ岳

毎日新聞旅行

9月30日・10月1日



甲斐駒ヶ岳にはこれで6回目である。前回は2008年に黒戸尾根から単独で登っている。あの頃はまだ強かったので、何も考えずに登ることができた。今は余計なことばかり考えて、体のほうがすくんでしまう。ろくでもない知恵が付くよりも、体が自在に動くほうが良い。今回の主目的は仙水小屋に泊まることである。黒戸尾根の時以外は毎回この小屋の前を通っている。しかし泊まったことがない。ブログなどを見るとケッコウ評判が良い。オヤジはこの季節でもランニングシャツ1枚で夕食の準備などをしている。夕食は外のテラスで食わせる。この件だけは北アルプスの船窪小屋と一緒にあるが、あちらの場合は小屋のファンクラブみたいのがいっぱいいて手伝ってく



仙水小屋

れるが、ここではオヤジとその奥さんと思える人の二人だけだ。毎日新聞旅行のツアーリーダーの増田さんと宮代さんが手伝っていたが、大変だ。オヤジは“うちは定員制です”とこともなげに言っていたが、一昔前だったら山小屋の定員制なんて信じられない。夕食には、量は少ないがマグロの刺身やてんぷらが付いた。朝飯は 3 時半という要求にもこたえてくれて、4 時半の出発の時には夫婦で見送ってくれた。こんなところが評判の素なのだろう。私が泊ったのは別館であったので、これ以上のことは解らなかつた。

ヘッドランプ頼りの歩き始めである。仙水峠を少し超えたところで朝焼けである。天気予報は午後から雨ということで、ツアーリーダーの増田さんはしきりと急かせる。休み時間も 5 分とか 3 分さえある。昔の山の歌で新人哀歌というのがあって、その中で“チーフリーダーはジジ臭い！”というのがあったが、まさにそれだ。日が出始めると明るくなるのは早い。ヘッドランプも不要になる。登りはきつかったが、過去に何回も登っているのので、ここを頑張れば何とかかなるということが分かっているのので、気分的には楽なものがある。メンバーはバアサマ 11 人にジイサマ 4 人である。いつもの毎日新聞旅行のメンバーに比べると、若干ト



日の出前の仙水峠



朝焼け交じりの日の出

ロイ気味であるので、少し楽だ。駒津峰へ登ると視界は 360 度である。甲斐駒がそそり立つ。目を転じれば北岳と間ノ岳、そして遠くには中央アルプス、その後ろに御嶽山、右へ行くと乗鞍連峰、さらに北には北アルプスの連山が連なる。お天気は下り坂などということとはどこか別の世界のことのようなものである。



駒津峰からの甲斐駒



駒津峰からの北岳（左）と間ノ岳（右）

しかしそんな考えは、その先の甲斐駒への登りですぐに崩れた。風がだんだん強くなってきて、甲斐駒の山頂では昼食もそこそこに引き上げざるを得なかった。

山頂には歴史深い山らしくいかにもそれらしいという表現がふさわしい社が構えている。

学生時代にここに登った時に、“手力男命”という文字を書いた石碑があって、ナンだこれ“テリキダンメイ”って、「センズリの神様か“、と思っていた。

一緒にいた飯塚君が家に帰ってそれを言ったら家族から”あんたそれで大学生かい？、テジカラオウの尊を知らないの！”とバカにされたらしい。

今回は、甲斐駒の特徴である摩利支天に登った。なぜか今まで登ったことがなかった。いつも先を急いでいたせいであろうと思う。

高速道路などから甲斐駒を見ると、あんなところに行けるのかなあ、と思う。しかし行って見たらなんということなかった。



甲斐駒山頂の神社



摩利支天